

ランドスケープデザイン 暮らしの景観・環境をデザインする

LANDSCAPE DESIGN

NO. 59 | 隔月刊
2008年4月号
定価1,995円

The scene and environment of a life are designed.

特集 「中国へ」

和諧社会へ向かう中国に ランドスケープからの提言



巻頭論文「中国の都市をめぐる人と自然の和諧」—ノ瀬俊明
2010上海万博への提案——生態建築・GREEN PLANET
次世代デザイナーたちの仕事
中国庭園の基礎知識

LANDSCAPE WORKS—— 鳳コンサルタント/プレイスメディア
/プランタゴ/大成建設

連載——進士五十八が語る「大橋鎬志の仕事」

ランドスケープ・フォトグラファー

細川和昭が観た中国——西安黄土高原



党家村の田畑



黄土高原の崖(50m前後)に挟まれた溝谷
平野に300戸余りの集落が拓けている

細川和昭 (ほそかわ かずあき)

1940年大阪市生まれ。水、川、都市をテーマにした個展・グループ展を多数開催。写真の立体的展開をおこなうなど、精力的に活動した写真家。2001年中国西安にて、写真展「党家村—等身大の眼差」を開催。翌年6月、享年62歳で永眠。



黄土高原

文=細川和昭

窑洞の村 揚家溝

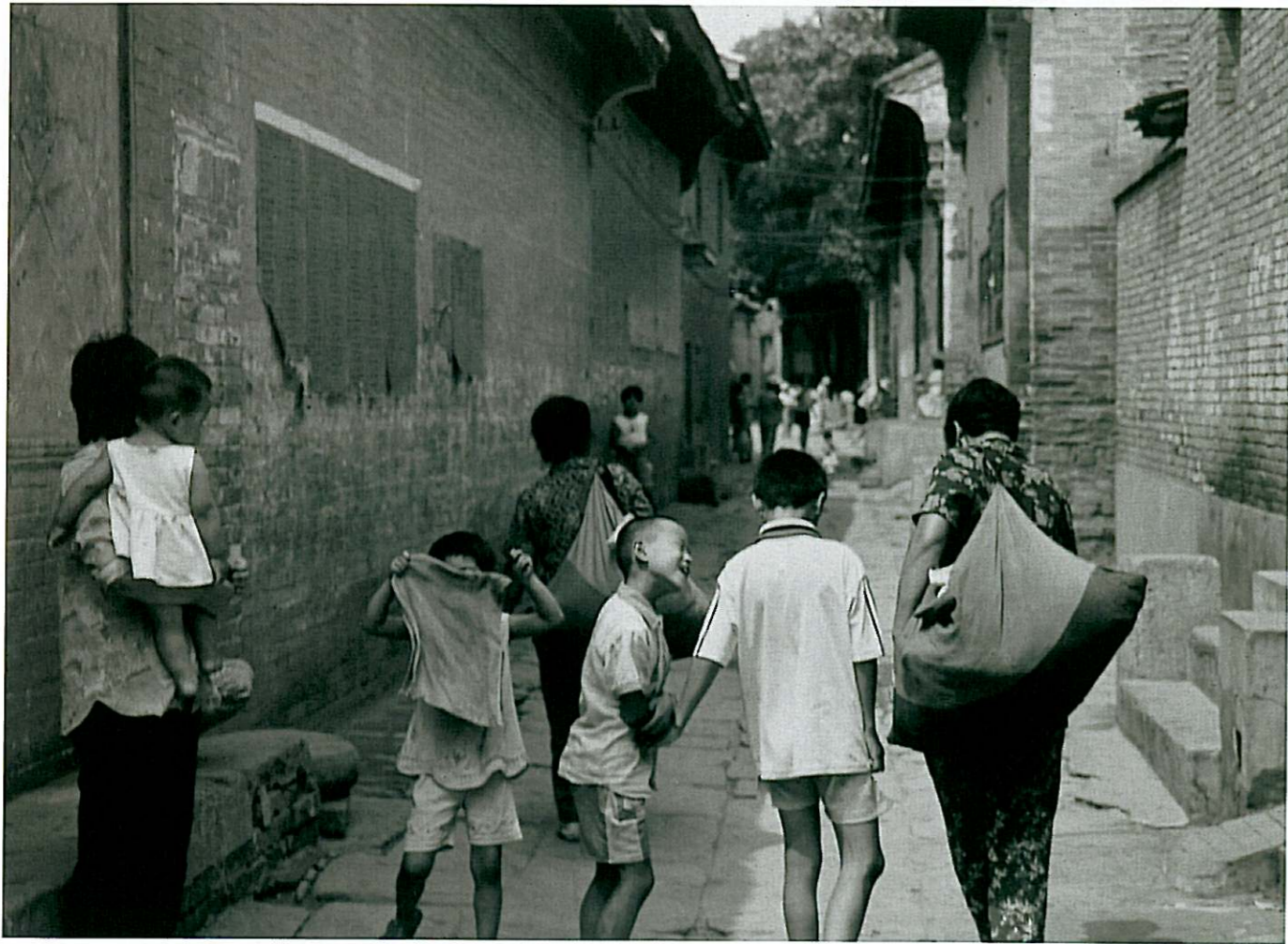
朝6時半、西安を出発。車で銅川、延安、綏徳の町を通り、北へ約600km、ひた走りに走る。土ほこりをあげ、いくつもの黄土高原の山々を越えた。夕方4時半頃には米脂という小さな町に到着。ここで公安局の入村許可をもらった後、揚家溝村への入り口をぐり、細いでこぼ道を東へくねくね40分。というのは昨年までのことで、今回はそれがアスファルトの道に大変身。ずいぶん走りやすくなったものだ。あたりはすべてが黄土の世界。窑洞のアーチ形のファサードが、あらわれては消え、消えてはあらわれる。羊の群れを追って帰宅する子供や老人、放し飼いされた鶏、家の前に干された洗濯物や夕焼空が唯一の色となり眼を楽しませてくれた。とっぷり日が暮れる頃、常家の窑洞への坂道の下によく辿り着いた。いつものことだが、待ちかねていた馬智慧さんと夫人の常菊芳さんが崖の上から私たちの名を呼び、坂道を駆け降りてきてくれた。揚家溝村滞在の一日目だ。

党家村 —— 等身大の眼差 ——

660年余の永い歴史を持つ党家村。明から清時代の古い街区や建築など良好な集落空間を今に伝え、近年、中国では北方の伝統的農村集落として注目されている。党家村は、陝西省西安市から直線で北東約200kmの韓城市郊外、黄土高原が抉られた狭い溝谷平野に拓け、谷を辿ると3km程で黄河に至る。また、韓城市周辺には史家・司馬遷の廟や兎王の治水門等が残り、山椒（花椒）の大産地としても有名な所。偶然訪れた党家村は優しい眼差で私に語りかけてきた。そこには日頃享受する都市が持つ利便性は見当たらなかった。心の中に埋もれ忘れかけていた記憶を呼び覚まし、集落と暮らしの風景が醸し出す豊かさが身近に迫ってきた。背伸びしない等身大の風景として。——見渡す限り平坦な黄土平原・迷路のような石畳の路・煉瓦に包まれた四合院の堂の波・意匠を凝らした装飾の数々・村人達の笑顔と思いやり等々——村を構成する全てが語りかけ、私を包み込んでくれた。そこが党家村だった。

【出典：暮らし方研究会編「—今、本質のライフスタイルを求めて—やさしさを生きる…」2004年、添標】

水汲み



早朝からの花椒(山椒)の収穫は2時頃に終わり、手伝いの子供たち戻ってきて村は一斉に賑やかになる

次ページ/大通りに面した壁面の慈禧皇太后(西太后)書と言われる文字のレリーフの前で得意満面の少年



細川和昭氏がこの世を旅立たれて今年7回忌を迎える。氏は本誌にはなくてはならない存在の写真家であり、ランドスケープ界の草分けといえるランドスケープフォトグラファーであった。ここに掲載した写真は、写真展を開催する事が叶わず2002年没後に遺作展となってしまった、「中国西安にて細川和昭写真展(党家村—等身大の眼差し)」で展示された作品の一部である。日本が経済第一主義の偏重で1990年バブル経済の崩壊が始まり、追い討ちをかけるように1995年阪神・淡路大震災が起り、環境と経済のバランスを欠いた日本社会が失ってしまったものへの帰帰を願う、氏の中国西安の旅だったのだろう。(T・M)